

着実に前進している授業実践

——全国教研集会の感想——

佐々木 享

I

日教組第26次・日高教第23次の教育研究全国集会は、1月28日から31日までの4日間、埼玉県で開かれた。技術・職業教育分科会は、浦和市の文蔵小学校で(ただし第2・3日の高校分科会は蕨市の県立蕨高校で)開かれた。両分科会の場所は、たまたま市は異っているが400メートルぐらいしか離れていない。私は全体会のほかは高校分科会に出席したので、高校関係を中心に感想をのべる。

高校関係のレポートは22都道府県から26件提出された。小学校1件、中学校35件であるから、高校関係のレポートは、ここ1、2年にくらべると少し減ったことになる。しかし、傍聴をふくめた高校分科会の参加者数は、最盛時には100名を越え、常時約80名であったといわれ、この数は小・中学校分科会の参加者数を上まわるものであった。レポートの学科別内訳は、工業13、商業6、農業5、水産1、分類不能1である。過去数年に較べると、工業がやや多く、商業がやや減っている。

はじめに、全体としての特徴というべき感想をいえば、高校の職業学科(以下職業高校という)について、近年における「基礎的な学力」の低下、無気力、非行の増大というような現象がほとんど例外なしにひろまっていることは各県各校から指摘されたが、そしてこのこと自体は過去数年と何ら変るところはないわけだが、以前ならそれにいわば悲鳴をあげているという感じで受けとられるような報告が多かったのにたいし、今年は、むしろこうした事態を冷静にみつめるようになったことが感じられた。それは必ずしもあきらめというものではなく、「基礎学力」の低下などという事態にたいして、教師(集団)がどうとり組むかが今問われているというより積極的な受けとめ方に転じつつあるように感じ

られたのである。「基礎学力の低下を放置することは生徒の基本的人權の問題であると受けとめる必要がある」という意味の発言があったことは、その一端をしめしていたといっ

II

てよいであろう。学力低下にどう対処するかという問題に関して、2、3年前までは、職業学校という「制度」を「改革」すれば何とかなるのではないかという、いわば他力本願ともいえるべきある種の短絡した発想も少なくなかったが、全くなくなったわけではないにしても今次集会ではそれがひじょうに少なくなり、むしろどうしたら学力のおくれをとりもどし、学園の「荒廃」を克服できるかという教師集団の話し合いと取り組み、前進が報告されるようになってきたのである。

山形の寒河近工業高校と富山の水産高校からの報告者は、職業高校の生徒の基礎学力の向上をめざして、各教科ごとに創意をこらしながら全校の教員が活動しはじめていることを報告した。この学校からの報告者は2人とも普通科担当者であった。職業科における「学力」問題への取り組みの報告が職業科の人から報告されたのではないという点に不満もあるが、普通科担当の人が、よくあるように困難な事態から逃げ腰になってしまうのではなく、真正面からぶっかって行こうとしているという事実、職業高校の将来に明るさを感じさせる報告であった。

逆の報告もあった。就職希望のコースの生徒には商業科目を課しているという三重の商業科の教師は、まだ教職3年目とのことだったが、はじめのうちは生徒の学力の低さや意欲のなさ、それに普通科担当の同僚から高校で職業科目を課すことに基づけな不信をぶつけられて悩んだと報告した。いわばありふ

れた状況だが、この報告者の場合、浜林正夫氏が商教協の機関誌で商業教育は流通過程で働く労働者の連帯と自覚の向上に寄与しなければならぬし、そうできるのではないかと述べていることを知って開眼したという。夏休みの課題に調査をさせたところ、流通市場に行ってそこに働く女性の姿をみた女生徒が、自分達の知らなかった働く人々の姿をみて感激してきたというような実践報告をしていた。

働くことの意味について教えていないのが今日の高校教育の通弊の一つだと私は考えているので、その意味でも前記の三重の教師の実践は注目に値するものであったが、同様に普通科の就職コースで商業科目を担当している静岡の教師は、「経営」という科目のなかでとかく軽視されがちなる労働法とくに労働基準法の諸原則を教えているという実践を報告した。働くこと、とくに生産現場で働くことに最も密接な関係していると一般には考えられている農業や工業関係の学科で、じつは案外に働くことの意味が教えられていないのではないか、そしてそのことが学習意欲の低下に拍車をかけているのではないか。この報告を聞きながらそういう感想をもった。

職場の教師集団のとり組みが大事だといわれるが、なかなか教師がまともなまじめなことはよく聞くことである。この点で、同じ専門学科の教師だけでもまともなまじめなことができる、という実践が埼玉の川口工高の電子科と北海道の美唄工高から報告された。後者の場合、一致してきめた目標はみんなで実践し、そして点検するということがあったが、当然のようなことだが大切な点を衝いているように思われた。

Ⅲ

授業実践に関してはたくさんの報告があった。めをみはるような優れた実践報告というものは正直のところ少なかったように思われたが、やる気になれば誰でもできそうな実践が多数出されたこと、これが今次集会

の主要な特徴であったように思われた。

埼玉の工業科の教師は、「内容の精選」ということは、とかく欲ばり勝ちな教師が、専門科目の枠をこえて主題ごとに検討して、切り捨てるべきものを思い切って切り捨てることだということを電子教材を例にして述べたが、他方、兵庫の商業科の教師は、教科書に書かれている間違いをみぬき、あるいは教科書に書かれていないことを教えないことによって結果として間違ってしまうことのないようにすることも大事だ、と述べた。両者は一見矛盾する如くであるが、より社会科学的な問題の多い科目では、さきの労働基準法を教えたという実践もそうだが、書かれていないことを教えることも大事だし、しかし、全体として切り捨てることによって精選するという考え方に馴れることは、今日の高校の職業教育には特別に重要な指摘であるように思われた。

報告者が欠席したので口頭報告はなかったのだが、愛媛の工業科の教師が建築測量の指導を報告しているなかで、指導項目を細かく分析して点検してみると、正しく理解されていない項目については、じつは教え方が不十分だったり不正確だったりすることがある、という事実を指摘していることは重要である。とかく内容が多く、必ずしも系統的には展開されていない専門科目において、「できない」原因がほんらい生徒側にあるのではない場合にも、責めが生徒の「学力」に帰せられてしまう場合が少なくないように思われるからである。

いくつかの学校でのミックス・ホームルームの実践、鳥取の共通基礎学習のとりくみ、京都の石原高校機械科の選択科目としての実習など、お互に学ぶべきものの多かった集会であった。(名古屋大学)